下町文化

第 200 号
平成10年11月15日
発 行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

歴史と文化の情報紙『下町文化』
17年の時を刻んで

『下町文化』は、本号で200号を迎えることになりました。昭和56年4月の創刊号以来、さまざまな企画や記事を取り上げてきた本紙も、17年の時を刻んだことになります。そこでこれを節目として、次号へのステップのためにも17年間の記事を振り返ってみることにしました。

『下町文化』創刊号をみると、初の区登録文化財の記事があります。

これは、昭和55年10月に「江東区文化財保護条例」が制定されたことを受けて、工芸技術など100件余りが文化財保護審議会に諮問され、答申のあった95件が初の登録文化財として台帳に登録されたという内容です。ちなみに現在の登録文化財は986件（指定文化財は13件）で、今年度で1000件を越えるのは確実です。また、芭蕉記念館の落成記念式典が行われたのも、昭和56年4月のことでした。

3号には文化財講習会、4号に江東区民俗調査、5号では歴史と生活展の始まりをそれぞれ取り上げています。この他にも、15号（昭和57年）記録映画の撮影開始、18号（同）文化財保護強調月間、49号（60年）第1回文化財保護推進員講習会などがあり、現在も継続している文化財保護事業の数々が産声をあげた当時の様子をうかがうことができます。

皆さんからご寄贈いただいた民俗資料を紹介する「ここにも歴史があった」の連載開始は8号からでした。歴史に関する企画では、「あるく・きく・かく　文化財レポート」で区内のさまざまな文化財を紹介し、「河川に刻まれた歴史」では区の特色である河川を取り上げました。最近では、「江東ゆかりの人物」「江東歴史紀行」「江東外見発見伝」を連載しています。

記事を振り返り、文化財保護事業を展開・発展させるためには、まさに私たちの力量が問われているという思いがしました。これからも『下町文化』をよろしくお願いします。

江東歴史紀行

毛利家の砂村抱屋敷

はじめに

8月号のこのコーナーで、現在の南砂二・三丁目辺りにあった萩藩毛利家の砂村抱屋敷について、この屋敷が、文政7年（1824）10代藩主を退任した毛利斉熙（なりひろ）の隠居屋敷にあてられたこと、同時に正室・側室および子供たち（三男郷之助・三女万寿姫・五女八重姫・六女安喜姫）が一緒に住み、「葛飾御殿」と称されていたことなどについて紹介しましたが、今回はこの抱屋敷の面積や建物・庭園などについて、同じく山口県文書館所蔵の毛利家文庫から見ていきたいと思います。

砂村抱屋敷の概要

抱屋敷というのは、武家・寺社・町人などが、独自に購入した土地に建てた屋敷のことです。毛利家では寛政2年（1790）に砂村新田の農民藤兵衛・平井新田の農民安右衛門からこの土地を買い入れました。享和2年（1802）堀田大蔵大輔へ譲渡した後、文政4年（1821）立花右近将監から再びこの地を購入しています。

文政7年に隠居屋敷となった時の面積は砂村新田に1万7770坪、隣接する平井新田に4万3844坪、合わせて6万1614坪となります。その後周辺地の買収、埋立てなどをして、弘化元年（1844）には、砂村・平井両新田合わせて10万2153坪の広さの土地を所有することになります。

「葛飾御殿」の造営

隠居屋敷において家族と共に住むのは、斉熙の希望であり、そのための建物の造営が始まります。しかし、萩藩の財政はかなり逼迫していた様子で、あまり立派には造らない、手軽い普請で間に合わせるようになどが申し合わされています。また正室の住む「裏御殿」と三男信順の「御座所」については、資金繰りに難渋していたことが窺え、本棟より少し遅れて普請に取りかかり、出来次第この二人が引き移ることになっています。

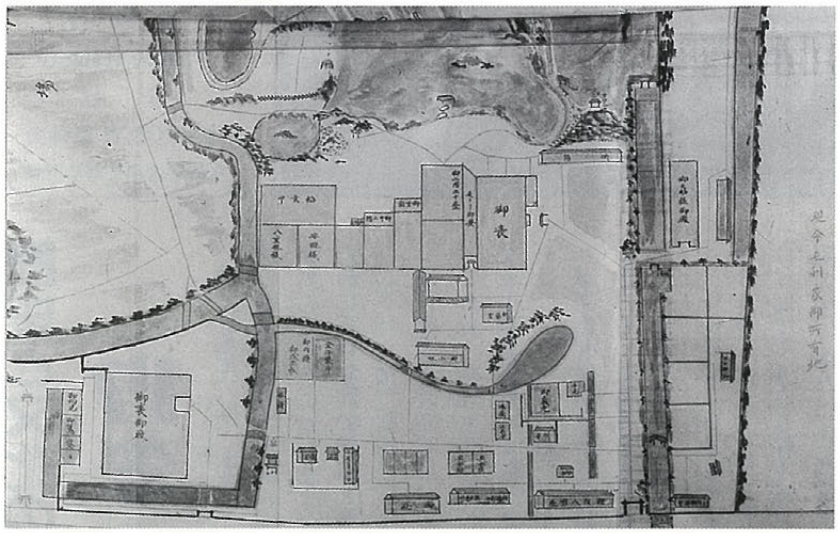
下の写真は、8月号でも紹介した「葛飾邸図」の屋敷の部分とその見取図です。

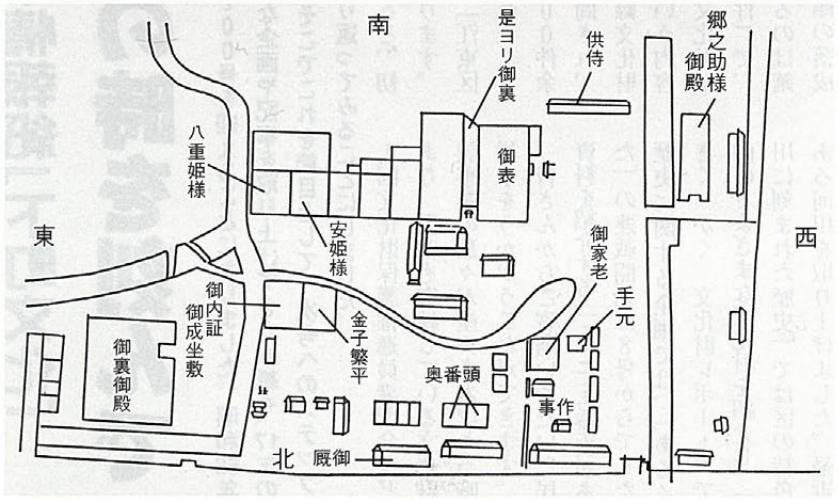
中央の本棟には「御表」とお姫様方の居所のある「御裏」、西に「郷之助様御殿」、東北に正室のための「御裏御殿」が建てられています。

本棟の北側にある「御内証御成坐敷」は側室のための建物で、隣の「金子繁平」は、その父親です。その他、「御家老」「作事」「手元」「奥番頭」などと記された建物が配置されています。

これらの建物が建てられていたのは、敷地の西北に当たり、現在の南砂中学校（南砂2―3）の辺りと推定されます。このほか、敷地内には池と築山を配した庭園と鴨猟のための鴨堀がありました。この庭園の様子については、1月号で紹介する予定です。

（文化財主任専門員　向山　伸子）





「葛飾邸図」見取図

新刊案内

江東ふるさと歴史研究論文集 二

『江東ふるさと歴史研究論文集』は、区民の皆さんが、独自に研究した成果を論文にまとめたものです。平成10年度は、6点の応募があり、うち3点が入選しました。『江東ふるさと歴史研究論文集』二には、この入選作3点を収録しました。

収録論文は次の通りです。

「坪井信道と安懐堂・日習堂の塾生達」
猪狩　明美

坪井信道とその門下生たちの去就についての研究

「白魚漁と江東区」
冨永　文昭

江東区の周縁で展開された白魚漁の歴史的変遷についての研究

「明治維新直後の東京の米穀流通について
―問屋組合設立を巡って―」
増田　宏

深川佐賀町を中心とした流通史の研究

A4判　1部350円

生涯学習課文化財係窓口で頒布中

「東京都功労者（文化功労）表彰」を受ける

伝統工芸保存会会長　大岩仲治さん

江東区の伝統工芸保存会会長として、工芸技術の継承と発展に尽力された大岩仲治氏が、このたび10月1日「東京都功労者（文化功労）表彰」を受けました。

大岩氏は、昭和56年3月に区登録無形文化財（工芸技術）の漆工の保持者として認定され、平成元年12月には区指定無形文化財の保持者に認定されています。

昭和57年1月に江東区伝統工芸保存会を発会させ初代会長に就任した大岩氏は、以来、伝統工芸技術の保存と後継者育成に力を注ぎ、その指導力により会の活発な運営に貢献してきました。最近では、全国各地からの修学旅行における体験学習の受入れ、工芸技術の実演公開など、多方面で活躍されています。平成4年4月には東京都伝統工芸技術保存連合会の会長に就任し、また、区や地域での活動を通じて地域社会の発展にも貢献されました。

これからもお体に気をつけて、益々ご活躍されますようお祈り申し上げます。

芭蕉記念館から

ジュニア俳句教室

日時　12月12日（土）午前9時30分より11時30分（集合9時20分）
会場　2階研修室
内容　俳句をつくってみよう
対象　区内在住の小学生30人（先着順）
費用　無料（筆記用具持参）
締切　開催日の前日
申込　窓口または電話で

◇芭蕉記念館
江東区常盤1―6―3
☎（3631）1448

工匠館（たくみのやかた）から

伝統の技　実演公開

毎月第一・第三日曜日に工匠壱番館（森下文化センター内）で行っています職人さんの今後の実演日程は次のとおりです。

11月15日　仕舞袴製作　杉浦　武雄
12月6日　江戸切子　須田　富雄

＊時間はいずれも午後1時～3時

文化財保護の活動の輪ひろがる
「江東区文化財保存愛護会」が発足

昨年の188号（11月号）で文化財保護推進協力員制度とその活動についてご紹介したのをおぼえていますか。協力員は、教育委員会が区民の方に委嘱して、文化財の保護・愛護啓発にかかわる活動のうち、主に教育委員会が行う事業に協力していただくものですが、今回ご紹介するのは、ボランティアとして自発的に結成された「江東区文化財保存愛護会」（以下、愛護会）の活動です。

愛護会の目的と発足

去る8月11日、現協力員と協力員OBの有志が集まって話し合いがもたれました。その内容は、文化財愛護活動の一環として、区が設置した文化財の標柱・説明板などの清掃活動を行ってはどうか、というものでした。その後も話し合いがもたれ、会の名称も「江東区文化財保存愛護会」に決定し、具体的な活動実施の運びとなったのです。

会員は現在20名で、協力員とそのOBによるメンバーです。会長（川村昭治郎さん）の他、幹事長や会計などの役職もそれぞれ決められ、いよいよ10月17日に清掃活動を行うことになりました。

愛護会の清掃活動

10月17日の活動に参加したのは13名です。事前の打合せで、参加者は深川老人福祉センターに集合し、そこから3コースに分かれ標柱・説明板の清掃を行うことになりました。当日はあいにくの雨天で、いろいろと意見はあったようですが、幹事長の小沢健一さんが「説明板の確認だけでもいいし、とにかく1回目なのでコースをまわるだけでもまわろう」と力強く挨拶し、決して無理をしないことなどの注意のあと、3班に分かれて出発しました。

文化財の標識といっても、新しいもの、古いもの、形などさまざまです。実際コースをまわってみると、工事中のため標識を取り外しているところや、近所の人が清掃していると思われるものもありました。なかには、スプレーやマジックによる落書き、シールが貼られている説明板もあり、心を痛めたり憤りを感じながらも、愛護会の人たちが街をいたわるかのように清掃していました。

文化財や神社・寺院の説明板はその街の顔だと思いませんか。史跡めぐりで説明板が汚れていたり悪質な落書きがあったとしたら、それを見た人はどう思うでしょうか。清掃活動に同行して、愛護会の人たちの地域を思うやさしさにふれることができました。

今後の活動に向けて

清掃活動の終了後は、富岡区民館で反省会がもたれました。そこでは雨天の対処、会による標識等の台帳作成などさまざまな意見がありましたが、とにかく初めての試みですから、試行錯誤のなかから活動方法などがかたまっていくことでしょう。実際に清掃を行ってみないと分からなかったことも多いはずです。

愛護会は、いずれは史跡めぐりを企画・実施するなど、活動の輪を広げていく予定だそうです。今後もこのような会が何らかのかたちで増えていくことを期待したいものです。